

高田かやさん

(コミックエッセイ作家)

「カルト村」の内と外

高田さんは、生まれてから十九歳まで、私有を禁じる自給自足型の共同体で過した。そこでの子供時代の実体験を描いたのが、コミックエッセイ『カルト村で生まれました』(文藝春秋社)。一般社会に出て、結婚もされた高田さんは、「内と外」をどう感じるのかを聞いた。

夫と、その家族の理解

——村での生活を漫画にしようと思ったきっかけについて教えてください。

いろんなことが合わさって『カルト村で生まれました』ができたと思っています。ただ直接的には、同居しているふさおさん(夫)のお母さんでしょうか。それまでは一般社会では偏見を持たれるから、村の話をするのはタブーだと思っていました。しかし、ふさおさんやそのご家族は、村の話をして私に対して偏

見や差別意識などを持つことなく、私の生い立ちや村のことを聞いてくれました。なかでもお母さんは熱心に、そして感心しながら聞いてくれたんです。そういう家庭で暮らしているうちに、村のことは一般の人の視線を恐れてひた隠しにするようなことでもないかもしれないと感じ、絵を描くのも好きですし、漫画にしてみようと書き始めたのです。

——漫画を描き始めたのはいつですか？

もともと、絵を描くのが好きで、小さいころからよく描いていました。そもそも村では漫画が禁止されていたので、身の周りに漫画がありませんでした。村外

の小学校に通っていたので、そこで友達に借りてこっそり読むことはあっても、自分自身が漫画やお話を描きたいとは思っていませんでした。

漫画形式で絵を描き始めたのは中学生からです。当時の村では、高校に進学させてもらえなかったということもあって、中学校時代はあまり真面目に授業を受けず、授業中とても暇だったんです(笑)。なので、その暇つぶしといってはなんですが、ルーブリーフー



ただかや 生まれてから19歳まで“カルト村”で共同生活を送る。村を出て一般社会で出会った男性と結婚。村での実体験をCREA WEBの「コミックエッセイルーム」に投稿しデビュー。ベッドで寝転びながら、本を読みつつ何かを食べていることに幸せを感じる。

ページに線を引いて、なんとなくコマ割りをしてみると十二コマになった。それから「12コマ漫画」を描くようになりました。それを村の子や、学校の同級生たちに見せると「面白い！」と受けて、それから描いた漫画の予約や依頼が後を絶たず……(笑)。描くのが楽しかったので、需要と供給が成り立ったということでしょうか。

ただ中学校を卒業してからは、村での労働が大変になって漫画を描く暇もなくなり、自然と描かなくなりました。だから今回の漫画が久しぶりに描いた漫画です。

いろんなふうに使われる

——インパクトあるタイトルですね。

文藝春秋社に初めて投稿したとき、タイトルは「カルトで生まれました」かなあと考えていました。ただ、取りあえずは編集の方の目に留まって、読んでもらわないと投稿する意味がない。だから、文藝春秋で出版されていた『カルトの子』という本に関係している内容だとアピールするために、そのまま『カルトの子』